♪～いちきょう～「響き」～♪　　改訂版第1号

♪～市響 107 回・「交響曲の午後」定期演奏会にお越し下さりまして有難うございます。～♪
令和元年7月7日（日）午後２時 開演　会場：市川市文化会館大ホール
主催：市川交響楽団協会、 共催：市川市、 協力：ヤマザキ製パン（株）、（株）全日警、（株）伊藤楽器、

♪～「響き」～♪復刊　　ヴィオラ　星　乘昭

市川交響楽団が創立された翌年「響き」と言う広報誌が立派な活版印刷で発行されました。５年ほどで出されなくなり、その後当時インスペクターの内藤氏、その後私がガリ版刷りの「市響ニュース」を連絡用として団員向けに発刊いたしました。その後、賛助会員・維持会員報として形を変えました。そして今回少し趣向を変えて創設当時の「響き」という題をお借りして発刊させていただきました。

指揮者三原明人氏と市響が誇る、鉄壁な5人の弦楽器パートリーダー！
左からコンサートミストレス立田祥子、チエロ福原耕二、コントラバス小林真弓、
ヴィオラ内田綾美、第2ヴァイオリン武藤敦子

☆♪～ブルックナーの交響曲　第５番　の聞き所～☆♪

指揮者三原明人氏に今回の演奏会に対して特別に寄稿していただきました！

ブルックナーの交響曲第５番は「祈りの音楽」だと思います。他の交響曲全ても同様にブルックナーが「愛する神」に捧げた作品で、ほとんど宗教音楽と言っても差し支えないほどです。
初め生まれ育ったリンツで学校教師となり、やがて地元のザンクト・フローリアン修道院のオルガニストとして活躍し、バッハ以来の即興演奏の天才と言われたブルックナーは、40 歳を過ぎた頃から交響曲の作曲に取り組み始めます。熱心なカトリック信者としての信仰心を音楽で表現し、神に近づこうとしたのだと言われています。
第５番は特にその傾向が強く、ブルックナー自身この曲を「信仰告白交響曲」と呼んでいます。
曲は４つの楽章で構成され、その第１楽章と第４楽章がどちらも変ロ長調で全く同じ曲想で始まり、中間の２つの楽章もテンポこそ違いますが同じニ短調で全く同じモティーフで出来ています。曲全体がこうしたシンメトリー構造になっていて、まるで大きな教会のような構造物を音楽で仰ぎ見るかのようです。
しかし、注目すべきなのはそれぞれ３つの主題を持つ立派な両端楽章よりもむしろアダージョの第２楽章でしょう。作曲に当たり、ブルックナーはまずこの楽章から書き始めたそうです。この頃はウィーン音楽院で作曲の無給教授に就職していましたが、生活は苦しく貧乏のどん底でした。五線紙を買うお金もなく、そうした現実を憂い嘆くかのような悲哀に満ちた主要主題がオーボエで奏され、やがてあたかも神の懐に抱かれているかのような慈愛に満ちた副主題が弦楽で現れます。それらが交互に再現された後、至福の幻想は消え去り、最後は自らの死と魂を天へと運ぶ天使の声がフルートに現れ、埋葬のコラールが金管楽器を中心に壮大に描かれます。まるで「マッチ売りの少女」の物語を音で辿るか

のようなドラマが終わった後、エピローグとしてホルンやオーボエで冒頭のテーマが再現されますが、これは「音楽のドラマでは天国へ行けたけれど、現実の自分は…」とブルックナーが途方に暮れているかのようです。しかし最後の 3 小節でまたフルートの天使が現れ「悲嘆することはない。あなたにはきっと輝かしい未来がある」と予告し、明るいニ長調で静かに曲を終えるのです。ニ長調というのはバッハやヴィヴァルディといったバロック時代の作曲家たちがその宗教音楽で神を讃えるグローリアという作品で使った調です。ベートーベンのミサ・ソレムニスもニ長調で書かれています。ブルックナー自身は「このままで終わるわけはない！神様は決して私を見捨てない！」という心の内の信仰を小さな声で表明したのかもしれません。実際、この交響曲はそのまましばらく演奏される機会に恵まれず、作曲者は生前聴くことは出来なかったのですが、数年後に作曲された第 7 交響曲の初演が大成功となり、以降ブルックナーの名声は第 5 の天使の予告通り国際的なものとなるのです。

最後に、この交響曲を聴いた大変興味深い経験をお話します。それはドイツのミュンヘンで高校生を対象とした音楽鑑賞教室に於ける演奏会で、チェリビダッケ指揮するミュンヘンフィルが演奏しました。どこにでも不良少年というのはいるもので、開演時間の前にホール前でうろうろしていると、演奏を聴きたくない高校生がチケットを譲ってくれるのです（笑）。地元に住む友人の指揮者からその情報を得て、高校生たちに混じって演奏会に潜り込みました。

前半はオーケストラの部分的な実演を交えながらチェリビダッケが楽曲分析をして全曲の解説を約 1 時間強、休憩を挟んで後半は交響曲第 5 番全曲を聴く、というものでした。日本の鑑賞教室はせいぜい 1 時間未満だと思いますが、フーガなどの音楽専門用語を含む難しい解説を 1 時間以上も聞いた後に交響曲全曲を聴くなんて、ドイツの専門科でない一般の音楽教育のレベルの高さに驚いたものです。また、そのチェリビダッケとミュンヘンフィルがブルックナー生地のザンクト・フローリアン修道院で第 7 交響曲を演奏したときのことも忘れられません。宗教上の理由から教会内での拍手は禁止で、演奏前は指揮者が舞台に出てくると聴衆は全員起立して一礼、着席後に演奏が始まりました。

残響が信じられないくらい長く、しかもその余韻の美しいこと！最後の音が止んだ後も残響が永遠にか続くかのように響き渡り、しばらく誰も身動きすらしませんでした。

しばらく経ってチェリビダッケがオーケストラを立たせ客席に振り返ると聴衆は一斉に起立して無言で一礼、それでお開きとなりました。拍手の無い演奏会の何と感動的だったことか！

同じ演奏者による同じ曲の演奏をウィーンの楽友協会ホールで聴いたこともあります。驚いたことに、この時もザンクト・フローリアン修道院で聴いたときのように演奏終了直後には誰も身動きせず、割れんばかりの拍手はその 1 分くらい後に指揮者が振り返ってから起き、しかも一体いつ止むのか？というほど長く続きました。

ヨーロッパの聴衆にとってブルックナーの交響曲を聴くということは、教会のミサに参列して神父の言葉を聞くのと全く同じ感覚なのだと知らされました。

このような聴衆の前で演奏できたら、演奏者冥利に尽きるというものです。

本日お越しの皆様にも是非、耳と心の両方でブルックナーをお楽しみ頂ければと思います。

第2ヴァイオリン全員集合

ヴィオラ全員集合

ベートーヴェン作曲ピアノ、ヴァイオリン、チエロと管弦楽のための協奏曲ハ長調
リハーサルで指揮者とソリストとの打ち合わせ

3人のソリストから今回の演奏会による思い等を寄稿していただきました！

ピアノ　野上真梨子

「幼い頃から市川市で育った私は、今日の演奏会を特別に楽しみにしてきました。
小学校６年の時に市内音楽会で、初めてこの市川市文化会館の大ホールの舞台に上がり、緊張しながらも合唱のピアノ伴奏したことを今でも思い出します。月日を経てまたこの素晴らしい舞台に立てること、そして歴史ある市川交響楽団の皆様と初めて共演させて頂けることを心より嬉しく思っております。
今回演奏致しますベートーヴェンの通称"トリプルコンチェルト"の特徴は、何と言ってもピアノ、ヴァイオリン、チェロの３人のソリストとオーケストラという珍しい編成です。通常の協奏曲（コンチェルト）は、ソリストは指揮者とコンタクトを取ってオーケストラと音楽を作るのですが、この曲ではソリスト同士でも息を合わせる必要があります。（３人だけで演奏する箇所は特に！）ピアニストにとっては背後にヴァイオリニストとチェリストがおり配置的にアイコンタクトはほとんど取れないため、呼吸でお互いの音楽を感じ取っています。
そんな難しさはありますが、ソリストのそれぞれの見せ場や、室内楽的な掛け合い、そしてオーケストラの華やかさなど沢山の魅力が詰まった作品だと思います。
曲は３楽章からなり、ハ長調のもつ明るさ、エネルギッシュさが印象的です。１楽章はオーケストラの提示部ののち、チェロ、ヴァイオリン、ピアノの順で主題が出てきます。２楽章はチェロの美しいメロディーに注目して聴いていただきたいです。３楽章はポーランドの舞曲、ポロネーズのリズムが出てきて、生き生きとした楽しい曲想です。
現在私はベートーヴェンの生まれた国ドイツで勉強しており、以前よりドイツ音楽を学ぶ機会も増えたので、学んだことを沢山生かしてお届けできたらと思います。
指揮の三原明人先生を始め、ヴァイオリンの小高根ふみさん、チェロのピーティ田代櫻さん、そして市川交響楽団の皆様と全力で音楽を楽しんで演奏させていただきます。」
よろしくお願い致します。

ヴァイオリン　小高根ふみ

ある日、私のもとに１通のメールが舞い込んできた。「ベートーヴェンのトリプルコンチェルトでソリストをやりません

か？」このご時世、あり余るほどの音楽家がいるが、オーケストラと協奏曲を共演できる機会に恵まれる人はそう多くない。オファーを頂けたこと自体に感謝である。おまけに、ソリストを３人も立てる曲なんて、存在そのものが貴重だ。「一生に一度のチャンス！」そう確信した私は、一も二も無く飛びついた。

正直なことを書くと、私にとってこの曲は「存在は知っているが、そういえばちゃんと聴いたことがない曲」であった。しかし、今回の演奏会が決まってすぐ「まずは予備知識を入れよう」ぐらいの軽い気持ちでネット検索した私は、わずか10秒後に落胆する。なぜなら、目に飛び込んできた言葉は「今日ではあまり評価が高くない」「凡作」など、見事にマイナスイメージのものばかりだったからである！！！

しかし、本当にそうだろうか？曲と真剣に向き合ってみた今、それらの言葉には疑問を抱いている。

先ほどは「ソリストを３人も立てる」と書いたが、「室内楽の１カテゴリーであるピアノトリオ（ピアノ＋ヴァイオリン＋チェロ）にオーケストラが加わった協奏曲」という見方もできる。言い換えれば、室内楽でもあり協奏曲でもあるということ。実際に演奏していても、自分が目立つ所もあればチェロやピアノとともに音楽をつくる所もあって、まるで室内楽と協奏曲が同居しているかのようだ。弾きながら「今は主役、次は脇役…」と頭を切り替える必要は出てくるが、それも楽しみの一つである。こんな面白い曲には、今まで出会ったことがない。本番のその一瞬にどんな音楽が生まれるのか、じつに楽しみである。

最後になりましたが、本日共演する市川交響楽団の皆さま、三原明人先生、野上真梨子さん、ピーティ田代櫻さん、ご来場の皆さま、支えてくださるすべての方に感謝いたします。

チエロ　ピーティ田代櫻

本日ベートーヴェンのトリプルコンチェルトでソロチェロを演奏致しますピーティ田代櫻です。

いつかこの曲を弾いてみたい、という夢がありましたので、今回は大変光栄に思っております。といいますのも、大学で書いた博士論文の中で、トリプルコンチェルトは触れはしなかったものの、ベートーヴェンと、ベートーヴェンに影響を与えたデュポールというチェリストについて書いたからです。ベートーヴェンに限ったことではないですが、作曲の裏には何かしら「エピソード」があるものです。デュポールと出会う前のベートーヴェンはチェロの可能性についてまだそこまで認識していなかったと思われるのですが、デュポールはベートーヴェンに「チェロってこんなことできるよ！」と入れ知恵したことにより、チェロソナタの１、２番が作曲されました。これが1796年半ばといわれています。その７年後に着手したのはこのトリプルです。おそらく曲目解説に書かれていると推測しますが、この時、ベートーヴェンのパトロンでありピアノの生徒であったルドルフ大公のために、大公の演奏技術を考慮したピアノパートを、ヴァイオリンはカール・ザイドラー、そしてチェロの名手であったアントン・クラフトを想定して作曲されました。要は、大公を大舞台に乗せようと考え、でも１人じゃ不憫だから、強力な助っ人を加えて、さらにオーケストラも一緒に豪華な演奏会にしよう、と考えたのでは、と想像します（諸説あります）。

チェロのクラフトはチェロの名手であった、というのはすでに書きましたが、クラフト本人の書き込みである指使いも参照しました。正直、そんな指使いだれもできないって！というようなものでした。作曲の裏にあるエピソードや奏者を知ることは演奏に説得力を持たせてくれるので、面白いですね。さらってみた感想としては、「今まで弾いてきたどんな曲よりも難しい（どうしてこんな高い音をチェロに弾かすのか？！ヴァイオリンが弾いてくれればいいのに！）」。学生時代に、私の恩師に、「トリプルを弾くなら、半年前からそれだけに集中して必死にさらう事！」と言われていました。そんなに難しい曲なのか！いつか弾いてみたいぞ。そんな話をお仕事先のオケでしたところ、「あの曲はいくら頑張ってもチェロが下手に聞こえるから〇〇先生は絶対に弾かないんだって」「僕昔弾いたら自滅した」などなど怖いエピソードばかり…でしたので、一生懸命さらいました。

今回の演奏会を迎えるにあたって、トリプルと向き合う事で自分がレベルアップしている音がメキメキと聞こえるようでした（しつこいですが、それだけ難しいんです…！！）本日はそんなエピソードも心の隅に留めて演奏を聴いていただけるとまた違った楽しみを見つけて頂けるかもしれません。